

海住山寺

海住山寺は、三上山の中腹に位置し、瓶原(今の木津川市の川沿い)や恭仁京跡(旧都)、木津川(南山城の中心となる川)を見下ろすことができます。740年、当時の天皇の勅命により、瓶原の地に都が遷都されました。寺院の伝説によると、海住山寺は都の鬼門の方角に、都の工事と東大寺大仏建立の平安を祈るため建てられたと言われています。鬼門とは場所の中心から北東を指し、鬼が出入りする方角であるとして、万事に忌むべき方角としている。海住山寺は、眼下に見下ろす風景と同じくらい五重塔で知られており、この塔は国宝に指定されています。

歴史

740年、聖武天皇は瓶原の地に都を移しました。恭仁京と呼ばれるこの都は、744年まで首都とされていました。都を移す際、その平安を祈るためにいくつかの寺院が建てられました。海住山寺は、その中の一つとして、三上山の中腹に建てられました。6世紀に中国から導入された伝統的な日本の天文学である陰陽道では、北東の方位は鬼門と呼ばれ万事に忌むべき方角とされています。735年、海住山寺は都を守るためにこの鬼門の方角に建てられたと言われています。1137年に、灰燼の厄に遭い寺観のことごとくを失いましたが、70年後の1208年に中興の解脱上人貞慶によって再建されました。最も繁栄しているのは58以上の寺院構造で構成されていました。海住山寺は、南海にあるといわれる観音の浄土の名から、海(南海)住(観音が住む)山寺(浄土の山にある寺)を意味しています。

宝物と芸術品

海住山寺には、多くの宝物と芸術品が保管されています。海住山寺の建造物のうち、五重塔は国宝であり、文殊堂は重要文化財に指定されています。2つの建造物は鎌倉時代(1185–1333)に建立されたものです。鎌倉時代(1185–1333)に制作された四天王立像は、五重塔の中に祀られ

ていましたが、現在は奈良国立博物館に寄託されています。本堂と奥の院には、それぞれ1体ずつ仏教の中で慈悲の神である観音様が祀られています。これらの2つは十一面観音であり、平安時代（794－1185年）の作品と考えられ、重要文化財に指定されています。